

2021 年度 個人研究実績・成果報告書

2022 年 4 月 25 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏名	石井 泰幸
研究課題	場の理論から考える情報化社会について				
研究キーワード	場の理論、SDGs、Society5.0、イノベーション、テクネー、フロネシス、エピステーメ	当年度計画に対する達成度		2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた	
関連するSDGs項目	8.働きがいも経済成長も	9.産業と技術革新の基盤をつくろう	12.つくる責任 つかう責任	17.パートナーシップで目標を達成しよう	

1. 研究成果の概要

そもそも私がこれまで場の理論に着目したのは経営学を探求するうえで場の理論の理解が必須であると考えたからだ。とはいえ、場の探求は物理学が端緒となりファラデーをはじめとする物理学者が場を電磁波に依拠しその正体を明らかにしていった。それは電磁波の持つ引力と斥力といったプラスとマイナスの関係として表出されその相互作用が場といった空間を作り出してきたのである。湯川秀樹はその場を「何もないが何かある」と表現しそのプラスとマイナスが織りなす関係性が様々な現象に影響を及ぼしていくことを理論物理学の中で解明していくのである。

一方バーナードは電話会社のトップリーダーとして電磁波がコミュニケーションツールとなり人間関係に大きな影響を及ぼすことを目の当たりにしている。だからこそバーナードはその電磁波の考え方を企業の組織関係に落とし込んでいったのである。特に組織の三要素である個人と組織の関係といった相容れない対抗概念に対しコミュニケーションといったまさに電磁波が織りなす斥力と引力の特徴を引力に注視することで対抗概念を相互作用によって結合させていく理論を考え出した。それは道德概念を注入することで個人と組織をより強化され協働システムといった個人と組織の同時的発展を促す理論へと進展させていった。つまり場の理論こそがバーナード理論の要をなすのである。

そのバーナードの経営組織と場の理論との関係を認識した日本の経営学者、特に野中郁次郎はその電磁波によって描かれた場の理論を自らの経営学理論の構築に利用していくのであった。それが野中の知識創造へと広がりを見せ SECI システムとなりその経営理論が産業界を躍動させていくことになった。

しかしながらこういった場の理論のような物理学が社会科学に転用されることは決して新しいことではない。2500 年前にギリシャのイオニア自然学派では自然界の様々な現象を人間の関係性にまで延長していったのであった。一方同時代のイタリアではエレア学派といったピタゴラスの流れを継承する哲学の流れはイオニア自然学派といった自然科学的視点とは別に形而上学的視点を重視していくことになる。

実は場の理論にこの考え方を転用すると物理学を端緒とする場の理論が人間の関係性を探求する組織論に変奏されたとき自然科学的な視点が形而上学的視点へと転化しそこに恣意的な思考が発露されてくる。つまり場の理論はこういった自然科学的な要素と形而上学的要素の両輪から現在研究が進められているといえる。つまり場の理論こそ 2500 年前のギリシャ哲学を面々と受け取る学問として今日もなお色褪せず様々な学問領域に大きな影響を与えているのである。

転じて情報化社会といわれる世界も今や物質的世界と精神世界を併せ持つもので特に Society5.0 はフィジカル空間とバーチャル空間といった物理的原理と精神的原理を連関させるまさに場の理論と言い換えることができる。2016 年に閣議決定された Society5.0 は「情報の産業化」「産業の情報化」の両輪をさらに飛躍させるものとして注目されるがここで留意しなければならない点もある。それはこのフィジカル空間とバーチャル

空間の融合が人間性を高めるものと謳われていることだ。そもそも 1970 年後半より情報化社会という言葉が跋扈しインターネットが登場したときには IT 革命ともてはやされた。それは情報化といった華やかな世界が実は物理的原理のみが注目され精神的原理がおざなりにされてきたことである。それはその情報化の持つ華やかさがいずれ人間を支える精神的な側面を補完するものであると期待したからでありいずれ人間的側面がその物理的側面で癒されると勘違いしたからである。それは多くの悲劇を生みそのことはこれまでも実現することはなく高度情報化が様々な面で人間性を阻害してきたことは周知のとおりである。

近年サステナブル社会を迎えこの Society5.0 はサステナブル社会をより深化させるものであるかが問われている。エネルギーも自然エネルギーへと人間社会にやさしさを示す方向に舵を切っている今改めて Society5.0 はサステナブル社会に寄与するものであるかは我々が過去の過ちを反省し情報化社会の構築に対しより謙虚になるべきだと考えた。その意味で改めて場の理論に依拠した情報化社会の研究はこれからも永続的に続けていくつもりである。

最後に私の本年度の研究の成果はアリストテレスのいう獲得された知や技術といったテクネーに対しテクネーに達していない知、そしてこのテクネーを乗り越えていく人間社会をよりよく生きるための創造的かつ倫理的な知であるフローネスの獲得を希求していきたい。それはエピステーメといった真の知を獲得することにつながりそれこそが本質的なイノベーション、つまり SDGs を躍動させる場の理論へと展開していくのである。

以上が 2021 年度の私の研究成果である。

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2022 年度では、上記の研究概要を論文化する予定である

【著書・論文（査読なし）】

【学会発表等】

特に無し。

3. 主な経費

2021 年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特に無し。